

第12回「文芸思潮」現代詩賞 発表

第12回「文芸思潮」現代詩賞

最優秀賞

第一二回「文芸思潮」現代詩賞に多数の御応募をいただきまして、まことにありがとうございます。おかげさまで今年も日本全国および海外から三六七名という多くの方に「応募いただき、充実したコンテストとなりました。心から御礼申し上げます。

五月末に締め切らせていただきました応募作の中から、まず選考委員会予選担当によって第一次予選、第二次予選、第三次予選の選考が行なわれました。それらを通過した作品を対象に、十月十六日、松尾真由美、五十嵐勉の各選考委員により、最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定しましたので、ここに発表させていただきます。

今回も佳作：入選レベルの層が厚く、これを考慮して昨年にひき続き「佳作」「入選」としてより幅広く顕彰することにいたしました。

奨励賞および佳作の作品の中にも多くの方に読んでいただきたい作品がたくさんありますので、それらの作品も、できるだけ「文芸思潮」誌上に掲載させていただく予定です。

現代詩賞の授賞式は、まほろば賞、エッセイ賞、イラスト・漫画賞と併せて、明年二〇一七年一月七日（土曜日）午後一時半より東京都大田区下丸子の大田区民プラザにて行なう予定です。今年は大田区民プラザの都合により、お正月早々に開催することとなり、ご不便をおかけしますことを深くお詫び申し上げます。受賞者以外の方も御参加できますので、親睦を兼ねて、お誘いの上ぜひ御来場ください。

第十三回「文芸思潮」現代詩賞は、明年も今年とほぼ同じ要領で募集を行なう予定です。どうぞ奮って御応募ください。

「文芸思潮」現代詩賞選考委員会／文芸思潮

優秀賞

「示唆の行方」「影合わせ」「ほころび」

由木名緒美（福島県会津若松市）

「遺書」「宿直室」「ままごと」

深町秋乃（熊本県熊本市）

「Trust」「ぬるい」「青の未来に」

徳永江梨子（福岡県太宰府市）

「未熟果」「点な話」「昭和さんくちゅあり」

中村郁恵（北海道札幌市）

「Liquid」「湾岸にて」「苑」

蒼井未龍（千葉県浦安市）

「空の記憶」「捨心」

千草ちとせ（東京都豊島区）

奨励賞

「白い漁村」「海のさばの工場」「嵐のあと」

木原 洋（千葉県我孫子市）

「死児のための祝祭」「虚言のシンタックス」「光と消滅のための喩法」

舟橋空兔（愛知県尾張旭市）

「消灯」「芝生のある公園で」「明鏡止水」

風野 榛（大阪府豊中市）

「海」「ゲノム」「ノンビリバー」

氏明日刻肢（静岡県焼津市）

「点点点点——スランプの森に——」

上田 勝（山口県宇部市）

「夢」「天地開闢」「至った場所」

インバ（奈良県奈良市）

「色彩について」「労働者たち」「有機の軀」

柏原 宥（埼玉県川越市）

「鎮魂」「菊ソネット」「樹木ささやき」

池山弘徳（宮崎県都城市）

「宇宙鳥の軟膏」「水の流れ」「水没したタナカ」

小川 調（大阪府大阪市）

「旅立ちにファンファーレはいらない」「少女の瞳は何度でも私を射貫く」

卯月 悠（東京都東大和市）

「回帰廊」「鳥」「水たまり」

麻生ゆり（福岡県北九州市）

「顕生代3.0」「港南大橋」

青木聡汰（東京都足立区）

「浸透圧」「閃光」「暦」

merongree（神奈川県川崎市）



選評



松尾真由美 まつお まゆみ

1961 北海道生まれ
詩集『燭花』（思潮社）
詩集『密約—オブリガート』（思潮社）で
第52回H氏賞受賞
詩集は他に『揺籃期—メッサ・ヴォーチェ』
『彩管譜—コンチェルティーノ』『睡濫』
『不完全協和音 consonanza imperfetta』
『雪のきらめき、火花の湿度、消えゆく蕊
のはらかな記憶を』（いずれも思潮社刊）
BOX詩集個展用パンフレット詩集
『装飾期、箱の中のひろやかな物語を』
現代詩文庫『松尾真由美詩集』（思潮社）
アンソロジー『現代詩最前線』（北溟社）
『小野十三郎を読む』（思潮社）『短篇集
夜』（驢馬出版）『ふるさと文学さんぽ
北海道』（大和書房）
北海道新聞文学賞（詩部門）選考委員

「わたし」ということ

松尾真由美

私は詩作品を語るときに主体という言葉と作者という言葉を使うことがある。ひとつの詩の作品のなかに現れる「わたし」（僕、俺）と、詩を書いている人（作者）である「わたし」（僕、俺）は同等とはいえないから。詩作品上の言葉の運動の渦中にいる「わたし」を主体と呼び、詩を想像しようとして、言葉を動かしているひとりの人間の「わたし」（僕、俺）を作者と呼ぶ。なぜなら、詩の言葉自体がそのつど生み出されてくるものであり、そうした言葉で造られている詩に現れる「わたし」という言葉も作品ごとにそのつど生成される「わたし」となっていくからだ。いわゆる生命体として瞬間性を携えているといえる。詩作品に「わたし」という言葉が出ていなくても、それは隠れているだけであって、主体（語り手）はある。もちろん、他の詩の言葉と同様に、生成させる側（作者）である「わたし」と完全に切り離れることはできないが、「わたし」（僕、俺）であつ

ても差異があるということだ。こうしたことを前提にすれば、主体という詩作品のなかの「わたし」がいる以上、詩は作者の感情や感傷と直接的には結ばれない。作者「わたし」に起こったことの感想を書けばいいというものでもなく、詩の言葉の運動によって、個人的な出来事のもつ奥に入りこまなければ、逆に詩作品に「わたし」（主体）が生み出されていないことになる。ということは、同じ作品のなかの他の言葉も詩の言葉になつていないともいえる。

たとえば、小説では私小説という分野があるが、詩には私詩という分野はない。必然的に作者の怒りや哀しみ、違和感や疎外感、感傷的なものへの応答など、人としての諸反応が詩の発端となるために、あえて私と名付け、詩の領域内で分けることに意味がないからだ。このことは、詩の厳しさを物語っているとはいえないだろうか。私詩という分野がないということは、そして、個人としての私の諸反応が詩の発端であることが当たり前であるのだから、個性は尊ぶが、私性を詩は認めていないといっているようなものだ。私は私を越えることを詩に要請されている。詩の言葉を紡ぐことによって、私が私を越境していく、そこに普遍性も生まれる。作品の質に違いがあっても、無意識的なものを主体「わたし」が詩の言葉で引き出してくることで、作者「わたし」に気づきをもたらす。詩の醍醐味である。詩を始めたばかりの人はこうしたことを説明されてもよく解らないだろうが、書き続けていくうちに（詩を経験していくうちに）体感的に得心していく問題だと思う。また、私小説でも、私事をただ綴っているわけでもなく、ないことをあつたかのように装ったり、書くために行動を起こしたりと、さまざまな要素を併せ持つことを鑑みれば、総じて、創作とは単純なものではない。解っている人は解っているだろうが、頭に入れておいてほしい。

講評に入る。今年度の当選受賞者のふたりは過去にも受賞経験がある。とても珍しいことだ。なぜなら、以前の受賞作のレベルではさらに受賞させることを選考する側は考えず、受賞者の作品に関しては何れも厳しく接するからである。こうしたことを念頭においてみてもふたりの作品は前進していた。

当選作の日疋士郎氏の作品は一作ずつ形を変えているが、三作ともに言

佳作

- 「頑なに」「八月の雨」「ありふれて、言葉」 遠藤芳子
- 「もうひとつの駅I」「もうひとつの駅II」 北原 満
- 「饒舌な空」「光」 寒川靖子
- 「記憶の片隅を漂う」 いしげきいこ
- 「しらすぼしばらーと」「たらばがにがに」「ぬけがら「脱皮」」 いまだまりこ
- 「人権の旅」「天から与えられた良心のように」
- 「きれいな声にジェラシーの花咲く」 西条由美子
- 「戦後七十年 梅雨に思う」「理由」 金 泉碧
- 「ひとりで」「ひとりじゃなくて」「もうひとり」 優谷明広
- 「子の名前」「Monday to Friday」「Keemun」 三谷藍
- 「ヒトクイバナ」 あおい満月
- 「都会の相」「かたみ」「精霊」 福島敏真
- 「昼顔」「最南端より」「仏蘭西革命」 飯島新吉
- 「利き手」「人工呼吸」「売り地」 嗟峨実果子
- 「浄化」「奇を衒う」「かえる」 てづかかなこ
- 「ダウンヒル」 立山 紘
- 「月の矢」「A子さん」「パレード」 小野寺幸
- 「少年の戦場に櫻が流れ」 新谷将史
- 「サイケな夢を見せてくれ」「空想の中で書と戦う」 日々野いずる
- 「エスプレッソとアップルパイ」 日々野いずる
- 「ひとりごと」 榊 慧

- 「かぞえる」「鬼」 為平友美
- 「蛹」「墨」「虚構」 月許温授
- 「淵源」 十路田道広
- 「満天の素粒子」「わたしが阿修羅であった頃」「はだかんぼ」 久郷竹光
- 「風車」^{かざぐるま}「監獄」「世界から望まれる男」 会田晃司
- 「脱皮」「スクリーンセイバー」「パラシユート」 上木戸晃
- 「原点回帰」 伊勢谷翔
- 「路地裏の蜂の私」「気おくれごっこ」「もう少しの」 北未知子
- 「絶望」「春」「奥州挽歌」 宇崎志乃
- 「過集夏」「卑怯者、指揮をせよ」「まぜなきや安全」 日
- 「夜あけ」「ばらのジャムを煮る」「もぐら」 佐野はるな
- 「夜の小鳥たち」「マリアの如く」「ピンクのヘドロ」 西嶋颯
- 「回転」「ものがひとりでに消える」「拐帯」 松岡里記
- 「傀儡」「烈火」「水滴的魚」 三蔵美佳
- 「午後一時の子兆」 牧野美弥
- 「歳月は 流れた」 佐藤清助
- 「母なる死へのエントロピー」「アイン」「手水の彼岸花」 佐藤考博
- 「女の箱」「ネロ」「あげは」 珠望
- 「Not airport」「ね」」「最大のわたし」 大形もにか
- 「死人の名を呼ぶ」「呼吸—あいたい—」「枇杷を食む」 桐木平十詩子
- 「蒼」「壊れかけのロボット」「波の上」 宮下炭五郎

葉のリズムが身体と一体になっていて、自在性を感じさせた。余白の取り方や句読点の付け方、そうしたもただの実験にはなっておらず、紙面において詩を造る行為が存分に発揮されている。内容的に精神のきつさを訴えてはいても、言葉のなめらかな流れがそれらを詩として昇華させることにより、読者は楽しく読めてしまうのだ。「もう行くね眠っていい聞いていなくていいちゃんと食べてあったかくして幸福に幸福にね明日の食事の心配とかせずにね」(「魔術」終行)。言葉の力を信じたくなる。同じく当選作の清水一美氏の「百済観音」は古典的な作品だが、その手法とテーマの一致で作品に深みを出す。法隆寺にまつられている百済観音は、出自の不明さと様式の特異さで文学者たちを魅了してきたわけだが(初めて人体に底知れぬ美しさを見出した驚きの心の所産―和辻哲郎)、そうした百済観音のイメージを二行一連とし、連綿と続けることで時空の広がりや表し、静寂のなかに悲哀も浮き上がらせている。漢語のふりがなで独特の読みを促し、「開かぬ水子の眼に／生れ来し鬼を徴す」と音は心地良く漢語の佇まいの静かな美しさが百済観音像と呼応しているようにも思える。テーマを描ききって以後に満足感をもたらしてくれた。

優秀賞の深町秋乃氏の作品は言葉の連結にすがすがしいセンスがあつて好感が持てる。詩作品上での言葉同士の一度きりの出会いをまっすぐに受けとめている感が主体の若々しさを醸しだし、無理をせずに己の磁場から言葉を発していることよつて、軽々しさもない。行分け詩と散文詩が提出され、どちらがいいと決定的なことはいえないが、散文詩「遺書」の方が完成度が高いと思う。言葉の飛翔にまとももあり、とても悲しい作品だが可愛らしくもあつて、あの世とこの世の境目が七色、赤、白と色のイメージで彩られることにより、遺書という不穏なものに明るさを与えている。

優秀賞の中村郁恵氏は独特の視点で対象を捕えていく。実際の物に対する反応が個性的に進んでいくことで不思議な世界観が表出され、「未熟果」では「未熟のもの、です」という出だしで擬人化なのかどうかという問いをこちらに突きつける。つかず離れずの対象との距離感が描写だけにどまらぬ空際を作りだし、ユーモアも感じさせるが、そこに浮薄さはない。作者が詩に対して、こまやかに神経を行き届かそうとしているためだ。

優秀賞の徳永江梨子氏の作品は実感的な言葉で綴られているように思えた。「ごまかしがないということだ。」「Trust」は連「こと」に飛躍があり、点と線足跡と空の対峙が作品を膨らませる。地上にいる(足跡)主体はさまざまに混沌を抱えているが、地に向き合う空を信じることで救いがあり、「いくつもの色が調和を始める／目を閉じるとほら／見えるよ」という絶妙な終連を生み出している。

優秀賞の由木名緒美氏の作品は硬さが気になるが、詩を書く必然を強く感じさせた。由木氏の言葉もごまかしがないという良質さを携えているのだが、硬さというのは硬質な作品という意味ではなく、硬直さを指す。言葉たたき出している感が読者に受け入れられるかどうか疑問が残る。書きたいことがたくさんあるようなので、読まれることをもつと意識して詩を量産すれば、自ずと詩は良くなっていくだろう。

優秀賞の蒼井未龍氏の作品は横書きで提出されているが、まず縦書きに直してほしい。パソコンでは横書きで詩を書いていても本はほとんど縦書きで出版されている。読ませることを考えれば縦書きにプリントするべき。作品「湾岸にて」は言葉の運動性に着目した。シュルレアリスム的な世界観が理屈を越えていて面白く「仔猫の両眼は欲するままに全裸となり」や「非対称の蜻蛉が突先に交わる」など虫や動物が入れ込まれているところに具体像が見え、言葉の循環性やそのエネルギーが詩の楽しさとして堪能できる。

入選

- 「葬儀の後で。」 「枯れ枝。」 梓ゆい
- 「雨の変拍子」 モタにサヤカ
- 「再犯の温床」 鶴橋からの便り
- 「罪悪感」「無」「不満」 石川湧太
- 「私を超える者」「現代創世」「忘却の記憶」 城戸祐介
- 「シャーマン」「艶福」「復讐」 原詩夏至
- 「太陽」「携帯電話(子へ)」「万里の長城」 今井登志子
- 「哀しい宝物」「水の底」「見知らぬ場所」 恵
- 「運命」「ピエロ」「コスモス」 松岡茂
- 「酸性雨」「聖戦」「英雄の死に様」 ちとり
- 「クラシック」「南部の雪」 星まゆみ
- 「本然へ 七十年後からの軌跡」 木原東子
- 「攪拌された世界」 藤代ヨウ
- 「愛を信じて火の中へ」「胸がイ・タ・イ」 keisell
- 「LAST・DAYS・ON・THE・EARTH」 伊東良子
- 「友愛数」「心模様」「サンマルティンの橋」 今井悠
- 「北国讃頌」「はつ戀」「夜明け(歩)」 柿澤正志
- 「おとう ばかやろうだ」 遠藤さや
- 「咽喉」
- 「絶え間なく果てしなく」「声なきものたちの涙」 三浦恵子
- 「ひとりじゃないから」 渡辺ゆふ
- 「点の存在」「幸福論」「親愛なる」 小山剛広
- 「風琴」「水底の聖堂」「夢と現の間隙」 田村全子
- 「ブルーブラック」 村上文緒
- 「言葉の光合成」「憧れ」「ライラック」

- 「ながれぼし」「わたしのまち」「やい」 朔田もの
- 「そこに過ぎゆく静かな日々」「パンドラの箱」 林セツ子
- 「実らなかつた恋 実つた恋」 金城真喜子
- 「蜜月」「ハイヒール」「丸い嘘」 森破裂
- 「春」「鬼火」「風のなかを歩く」 町田理樹
- 「スカラー針」 渡辺八景
- 「余裕は無い」「Eはチョコの味」「手はつないで」 清乃螢
- 「ノストラダムスが死んだ赤。」「道行き」「合わせる」 鈴木煙
- 「黒揚羽蝶」「壁」「満艦飾」 良月泰
- 「宣戦布告」「夢の終わりに」「慕情霊」 スガワラミキ
- 「決意の谷底に」「言の葉」「ツムギビト」
- 「空に溶けないこと」「カラスの好きなトマトのこと」「天気雨」 karakusado
- 「一円の花」「花の区」「無いものを探す人に捧ぐ」 郷原慶子
- 「せかいいち」「第五義」「落ち葉」 菊池月子
- 「迷宮プラネット」「ただしいひとのあいしかた」「オモイノカタチ」 中原夕莉
- 「BURLESQUE」 平岡靖生

大腸を引きずって歩くという皮肉が利いていてユニークだった。奨励賞の Heronree 氏の作品は筆力があるところに魅力があるが、字間が広すぎて読みづらい。プリントの設定を変えてみてはどうだろうか。奨励賞の岡村薫氏の「夢」は作品を展開させる力は感じさせるが、作り物めいている。「女」という他者の物語を作ってしまったからだろう。その力を自己の内奥へと向けること。奨励賞の柏原宥氏の「労働者たち」は新聞で見る言葉を詩に取り入れながらも詩として成功している。奨励賞の青木聡汰氏の「港南大橋」は印象的な夜の情景を構築する。「おやすみ。すべて忘れて一尾の魚となれ。だれかが水に入った波紋がたゆまいます。」こうした言葉に抒情の悦びが隠されている。



いがらし つとむ

常連の活躍と充実

- 1949 山梨県生まれ 山梨県生まれ
79 「流瀆の島」で群像新人賞を受賞
98 「緑の手紙」で読売新聞・NTTプリンター主催第1回インターネット文芸新人賞最優秀賞を受賞
2002 「鉄の光」で健友館文学賞を受賞
他に「ノンちゃん、NONGCHAN」「ワットプノムへ」「破壊者たち」など
評伝「詩誌『帰郷者』の栄光と悲劇」

五十嵐 勉

第十二回目の現代詩賞は常連の活躍と充実が目立った。清水一美氏と日正士郎氏の二人が群れを抜いており、最終選考会の評価でも他を引き離していた。

清水一美氏の「百済観音」と「えんぶり」は前回に勝るとも劣らないで、本来なら続けての受賞は避けたい選考委員側の心理を踏み倒しての最優秀賞受賞となった。同じコンテストで三回目の受賞は、現代詩賞、エッセイ賞、銀華文学賞を通して初めての快挙で、精進の結果と称讃したい。古典的詩句のたたままいは、大自然の荘厳な呼吸を湛えていて、能の舞のように端正な流れを作っている。これまでにない一つの詩の世界を創造し得たが、注文もある。確か最初の受賞時にも指摘したが、古語に依拠するあまり、現代の多くの読み手に伝わりにくい壁を持ってしまっている。極端に言えばこの高い壁の内に閉じこもる安居性があるので、これをどう打破していくかが大きな課題だろう。古典語でなければ味わえないのか——私伝わらないのか、歴史の時間は古い詩語でなければ味わえないのか——私はそのうちではないと思う。なぜなら、この現代においてこそ我々は生きていくのであって、大自然の荘厳は生きていく現代にこそ感受されるものだからだ。いつか清水氏がそれを乗り越えてくれることを心から期待している。もう一人の最優秀賞受賞者日正士郎氏も二回目で、持っているパワーを全開させた観がある。機関銃のように叫びと吐露をこめて言葉を連射し続

ける饒舌回転の詩は、尋常でない狂気のような滑空性がある。「ぐしゃぐしゃのぎりぎりのミラクルなのです／生きねば生きねばぐしゃぐしゃでも」という言葉にはリアリティが感じられ、一連の詩の原動力が窺える。他者にとりよりも自分に向かって叫び続ける自己回帰性は、言葉にこのスリルを欠くとき、鼻につき、過剰な満腹感呼び起こすが、今回の作品には、切羽詰まった救済の希求が勝ち、しつこい臭みが後退していた。ただ、詩は日正氏にとっては何よりも自己を救済するためのものであって、読者との共感のうちにより広がりを持つとする意図は第二義的なものである。表現の問題は解かれていないが、とにかく言葉を打ち続けるしか自己存立がない、回転を止めた時は死ぬ時でしかないという切迫感否定できない。これが本来の詩という表現のあり方かと問われれば、そうだとはい切れないもどかしさを覚えるものの、連射に圧倒され、切迫感に引き摺られてしまうのも、事実である。一つの運命を背負っているものであるならば、受け入れざるをえないだろう。

優秀賞の深町秋乃氏は、これまで肝心なところで現代詩的な技巧に逃げ弱さがあったが、今回の作品は真っ直ぐな直球の伸びが増し、弱点が補強された。表現の幅も広がり、進歩向上が見られる。妥当な評価である。由木名緒美氏も前回に続いての受賞者だが、詩の言葉の掘削力は増している。「影合わせ」の後半「ここで幹と骨だけになって遺跡となるのだ」という行には諦めの覚悟のようなものがあり、それが言葉の強さとなって深く響いてくる。この方向にもっと触手を伸ばせば、詩の結晶度はさらに増していくだろう。

千草ちとせ氏の「捨心」は、行間に潜む深い悲しみが、救いたい何かを湛えているところが心に残る。現実から取り残されたような孤独の宿命観が流れている。融和に焦がれる祈りのようなトーンが、詩に託さずにはいられない密かな魂を漂わせている。

私個人としては、優秀賞レベルの作品の層が薄く、そのために最優秀賞の二者が際立ったという感じがいなめない。しかし逆に奨励賞と佳作の層は厚く、それを推すか、それを落とすか苦しんだほど、同レベルの作品が輝いていた。その中でも特に印象に残っている作品を挙げておきたい。奨励賞の風野榛氏の「消灯」は背中に竜が乗っているという着想がおもしろく、それによって日々の喜怒哀楽の過ぎ行きを鮮やかに浮かび上が

せている点を評価した。

氏明日刻肢というペンネームはいただけではないが、「ゲノム」という遺伝子領域からの詩想はこれまでに見られなかったもので、十七歳という若い世代の視線を反映しているように思った。

インバ氏の「天地開闢」および「至った場所」は力作で言葉に力が漲っている点は評価した。ただ、対句のような表現や多すぎる名詞止め、重ねる表現などが、かえって詩の力を削いでおり、高い滑空を疎外しているように感じた。もっと表現を鍛え、膨らみを持たせれば大きなものが創れそうだ。

柏原宥氏の「労働者たち」は珍しい労働者を扱った詩である。ふつうこういう題材は詩にはなりにくいのだが、「納期厳守!」「コスト削減!」「大量生産された欠陥品」など詩の語感を備えている。現代への痛烈な批判を持った注目作品だった。

「宇宙鳥の軟膏」「水没したタナカ」を書いた小川調氏は、発想に個性があり、それが現代の利器の生活空間をよく反映した言語感になっているので、新しさを感じた。こういう捉え方でどこまでユニークな詩世界を創れるか、期待したい。

麻生ゆり氏の「鳥」は、全体に厚い詩の力量を示しているが、着想に飛躍が乏しかった分、縮こまった。大胆な発想を土台にすると、この厚みが生きるだろう。安定した力は認めているので、よい題材、よい着想を持つてほしい。

青木聡汰氏の洗練された着想は、鮮やかだが、軽い。詩に託すものの重みがないので、本腰を入れて書いていないものではないだろう。

「暦」「浸透庄」の neonbee 氏は科学現象をうまく人間の染まり合いなどに喩えて表現しているが、ゴタゴタと複雑になっていて停滞感があるので、流れを重視してコンパクトに振り切れることを心がけてほしい。力量のある人なので、字間も詰めて、読みやすく伝わりやすくすると、もっと明快な詩の姿を造形できるはずである。

現代詩賞も十二回を重ね、力量のある詩人たちを見出すことができた気がする。また、小さくてもそれぞれに尊い光を放つ詩群の存在も確認でき、そのきらめく営為にも触れられた。その意味ではまさに詩銀河である。さらにその成長と展開を次回に期待したい。



選考会風景

百濟観音

清水一美

虚空を食む
微笑みの内

何らの冥より
立たしし晨そ

踏み惑える隠の
影逐う夜毎仰ぐ

溟い淵に榮える
澄み透る月の容

増して真白くに
立ち枯れる御祖

身殺がす殯の庭
渴かしむ隠の哭

反す日景の象は
幽い眼に凍む魄

困う修羅に獄の
峙つ藍に囚われ

暁に縊れる月
屍を濯ぐ漏刻

流れ産す源より
調ぶる滴は悠か

月光紋敷く海の原
静寂を弥る水の律

閉じた水子の耳に
頻く繁く影に訝し

開かぬ水子の眼に
生れ来し鬼を徴す

星振るう降る夜は
俯晒さす天の河原

白骨打ち鳴らし
啞う隠の鬼囃子

(おにさんこちら
(てのなるほうへ

唯さす呼に
石積ますす

一二つ身を調べ
埋み火懐かす呪

積み石蹴り崩し
隠逐わす水子の

息むを知らず
暁月を鏡見る

冥に知らず
月の移り香

毀れ落つ
金咲う箔

幸わう虚空に
月の華弥らせ

吹き震う風の呼
流れ存う水の彩

い往き反らす
彼の岸の映え

倒しま結ぶ景し
清けく見ぬ先の

廻る潮に永く
禊がす御祖の

継ぎ果てぬ
骸に饗しす

隠起つ銀波の穂ゆ
打ち越し晨の来迎

照り反さす身は
絶えて空間なし

受賞の言葉

この夏から、万葉集を通して読み返している。折々拾い読みをしていたが、通して読むのは山小屋へ越冬に入って以来のことである。今回は、伊藤博士の「万葉集釋注」によってである。満誓の歌に答えた大伴旅人の歌

草香江の 入江にあさる 葦鶴の

あなたづたづし 友なしにして

を鑑賞して、博士は言う。

「万葉びとは、地名の布石に万感の思いを託すことが非常に多い。名は実体であった。とくに地名は人間の長大な時間に裏づけられた、厚みのこもる実体であった。」(万葉集釋注二) 人の名も、問われて名を託すことが、婚姻を結ぶ縁となる万葉人にとって、名は万霊のこもる実そのものであったのだろう。今人の我々が、忘れてしまったなにかである。

三度目の受賞に、いよいよ険しい岩場に差しかかったと、身の締まる思いがある。恐ろしい。が、それは喜びでもある。あの険しい高嶺の岩稜を一步一歩越えていく高揚感である。届かぬ天を仰ぐのもまた、その途次、疲れた体を山に預け得たとき。観じつつ音とし祈りながら。頂はまだ遠い。今はこの岩場で、静かに感謝したい。差し招く、すがたを胸に。



清水一美

しみず ひとみ

1960 青森県八戸市生
高校時代ジョン・キーツを知る
大学進学により上京
英文学でジョン・キーツを専攻
卒業間際、堀辰雄を知り、日本文学
科へ編入学
財団嘱託を経て、フリーの校正者に
森敦「月山」に惹かれ、不惑前の師
走、越冬すべく岩波文庫版「万葉集」
をザックに入れ、アルバイトとして
八ヶ岳の山小屋に入る
下山後、現職に就く

殯解かしむ
蘇る宙を号ぶ

虚空遍わす
微笑みの内

汝が名し
吾が霊と

魔術

日疋士郎

早朝目を覚ます体は食欲に休息を請求するもはや抗える範囲を越えているたおれたらひとびとは泣いてくれるのかもしれないが欲しいのは斃れる前の救いだとまたも目覚めていちばんに思う不安と恐怖生活の恐怖健康の恐怖正気を保つことの恐怖たもてないことの恐怖ことばが僕を見棄てたとき僕は狂うだろうたおれるならせめて幸福にたおれよう

恋人が目覚まして頭痛がするというタオルを絞るほかにもできることがあると気づいて香油を焚く温もりがほしくて布団の脚のへんに額を寄せるこのひとに僕は生かされている百歳年上だと冗談めかして彼女は愛は別離の恐怖と深くむすびついている生きものとしての健康な残り時間祈る代わりにちいさな台所に立つすくない材料でやっぱりスープを煮る

料理がきつと安定剤なのだ今日はチャウダーにしよう鍋に残ったきのこのスープとインスタントのコンソープと牛乳と味噌すこし袋にのこったアタリメ芽の出ちゃった最後のジャガイモ冷凍の食べかけの焼き鮭煮込んでとけあつてこうなるともはやまずしさも魔術だぜ

いとしいひとを氣遣うのはきつとだれもおなじでそれが同性の恋人であろうと変わらなくて青ざめた頬を赤くしたくて胸が痛いごめん僕は君の生活にずいぶん雑音だ胸が痛い親になることのない僕がギリギリ間に合ったのだ人間に

九歳のとき死と永遠をおそれて外に出られなくなった永遠に死んだままでいるなんてずつとずつと先のことでしょ心配して遊ばないなんてあんたバカみたい無邪気でけんこーなきようだいたちは駆け出してつた西陽の射す新築の六畳間から三時間くらいは経つたらうかいや三億年か膝かかえてるうち陽に焼けて毛羽立った畳正しかったのは僕だ人生は最初の直感を実証するプロセスにすぎない？ほんとは？

恐怖に耐える火をよわめて換気扇とめて呼吸とめて寝息を聞こうとする点滅する端末稽古場にゆくまでにあと六枚仕上げなければその後打ち合わせもう仕事休めないから夜職場出でしかしからだはひとつ切り分けられないしかし創れなくなったら僕は生きてられない崖っぷちに立ってる下を見ないとしたらそれこそどっか狂ってる

離人感がひどい脳がブレるいやブレさせない胡椒の代わりにもらいもののお茶から金色の花びらひとつまみ深呼吸して座って揺らぐモニタを見据える揺らぐからだところのなかで信じられるものはこの手で書いたものと舞台だけでそれだけは輝きをはなっけていてけっしてブレなくてこのほうがよほど僕の中からだ

それだけを抛り所にキイをぶつたたくうちおとすなぎはらうきりひらく今日をとりあえずめのまえの今日を火をとめるしばらく置くそれもまた束の間のちをつなく儂い魔術だとしても

もう行くね眠っていい聞いてなくていいちゃんと食べてあつたかくして幸福に幸福にね
ね 明日の食事の心配とかせずに

日疋 士郎 ————— ひびき しろ

詩作のほか、劇作・演出・役者。

2004年、メーカー人事部門退社後、療養中に無職にて演劇集団「ぶろじえくと☆ぶらねっと」を旗揚げ。のち学習塾講師としてアルバイトから勤務開始。

2014年、「文芸思潮」現代詩賞最優秀賞受賞。同年12月、劇団員の就職・病気等による退団で継続か断念かの選択を迫られ、起死回生を懸けた一人での活動を決める。単独運営にて三回の公演と、一回の共同企画公演が実現するも、家族のアルツハイマー発病と塾講師との両立で、今後の創作活動を模索中。

◇受賞記念公演情報→ <http://propla.pl.bindsite.jp/>



遺書

日疋士郎

なんどでもなんどでも甦つてみせましようどんな最低最悪の井戸からも血と腐ったおぞましい泥に塗れても汚れないでいましようなんならぞりりと

苦い砂を噛みくだいてもでもねあなた知っておいてくださいこれは手品

ではないのです身を任せてはいけないのです冷たい怒りや夜毎はらわた焼く苦痛

にも暴発寸前の破壊の衝動にも戸惑うほどの他者へのいとしさ

にもですからいつも冷たいほのほの中で脳だけが青白く発光

してゆきます天は微をしめすことにはとても

気前がよくつてぶあつい艶のある鉛のクリイムめいた雲からいま

ひとすじ光が射しました魂は此処

にあるのにこころがあのようにとても

うえに

在るのできつとくるしいのでしようそれらが躰のなかで一致することはついに

無いのでしよう感受性などというものはなやかな禍禍しいトリック

生きるには邪魔なもののですはやくに錆び付かせるくらいでたぶん

ちようどよいのです生命のぎりぎりのバランス

傲い器が必要なのです緩くゆるく狂っていきまます器と中身のバランスが

光のしめす駅をめざして急ぐ途中で

旧友の画家を久しぶりに見ました

つめたい石の道をこわばってあるいていました

彼の病気はもう十年以上続いています

おもわず振り返ったけど彼はもう彼以外のものには気づかなくて

老人の表情と足取りで過ぎてゆきました

輝くばかりの才能がいまも内から蝕むのでしよう彼の絵の放つ嗚呼

栄光

天国の気配を持つ

ひとすじの

地獄

光

はもう見えませんでした研ぎ澄まされたピアノ線はもはや触角の役目を超えて心臓ごと主体を内から切り刻んでゆきます歯を食いしばって向き直ってまたすこし歩くとそれらスライズされた切片でいっぱいの中身はきらきらとしゃらしゃらともう骨に響いてうるさいくらいですそれでも老いた桜並木のあかつきのきんいろハナミズキはとうに落ちて秋はうつくしくて愛はうつくしくていずれうしなわれる熱はうつくしくてってってってって充ちるものにおぼえず揺さぶられて背筋から脳へ電流がはしる時はピアノ線が天へむかつてのたうっているのでしょうか強靱なかかやかしい織毛きんいろにもぎんいろにもひかつて凍った尖った切片が電荷を帯びてひとつの方向をざざざちりちりといっせいに向くので軀もうなだれた神経もなにも高みへ突き上げるのです眩暈ああこんな高度には慣れないじゅんびできてない吊されるなまみにはそんなときにはたいていうたがおんがくが聴こえます目から涙さえながれますが紅くもなく泥水でもないのが透明なのがなんともふしぎですなんどでもなんどでも甦つてみせましようどんな最低最悪の井戸からも排水溝ナイルの底永久凍土の下マグマの内奥また海溝の最深部なんなら

死

からさえも微塵も汚れずにも知っておいてくださいこれは手品ではないのですもつと抗うことのできない一個のかぎりあるいのちをかけたなまましい目をおおわずにはいられないぐしゃぐしゃのぎりぎりのミラクルなのですせすから生きねば生きねば生きねば生きなくしゃぐしゃ

も。

受賞のつじば

一昨年四月、参加していた詩誌から突然切られる。血イ吐く思いで出した詩は説明なく一篇しか掲載されず。が、主宰代理にとの申し出を断ったのが遠因と解釈し、理由を聞かず反駁もしなかった。ココロの不安定な主宰だが尊敬していたからこの扱いはこたえた。ちくしょよ…と思いつつその詩を現代詩賞に投じる。九月最優秀賞の知らせ。劇団建て直しの突破口に思えた。が、受賞報告の電話で、最後にのこった団員に泣かれる。運営激務は限界にきていた。

十二月急な退団申し出、深夜のファミレスで団員の病気を知る、慰留するつもりが何も言えなくなり夜の踏切に立ちすくむ。以後一人で活動することになった。ちくしょよ…と思いつつボロボロになりながら一人での公演継続と共同企画「核の信託」演出、さらに本年九月、小さなカフェでの演劇公演は、カミングアウトを含む

作品、書くのも演じるのも心臓を掘るよな作業だったが、最多の好評を頂いた。が、公演終了後家族の介護の急進行と金策と疲労にガリガリ削られ膝をつきかかる、ここままでかちくしょよ…十月、ふたたび最優秀賞の知らせ。嬉しい！が、ちくしょよ…の↑プラスのベクトルへのセルフ変換システムはあまりにもくるしい燃費喰う。↑応援してくださいみなさま、あかるくタタカイつづけるつもりです、かんたんには諦めません、それだけが僕の御礼です、しかし、もしもなかばで斃れたら、その理由を、すこしだけ知ってほしいのです、どうか…。

宿直室

暗室に垂らした
昨日の原液、
逆止弁で出られない呻きと
海綿体を模して宿る月齢に
抗えない
わたしたちの
部首が棄てられた側溝に
喘ぐはだかたちの
ばらまいた一つだけの音階、
通学路に共鳴して
戯れ言になる小さな足音に
揺らぐ
漁り火のように
朧気な電灯の息で光る
猫の乳歯

遺書

七色の瞳で見つめた七色の世界は透明そのものでいつもわたしシャボン玉の中にいるみたいにとりぼちだっただから白い円柱のからだのどこかを嘔むことだけが目の前を鮮明にしてきたあの夕日みたいなのにその前でわたしつまでも被写体のままで立っている見透かされた機微の隙間にあてた造影剤でよみがえる裏側の世界を君たちはまだ知らないかもしれないけれどももしかしたら明日には裏側の表面赤い光で染められているかもしれないつかきつとわたしその表面を裏返してみたいそれはとても痛いことかもしれないけれどその痛さを象つたのは夜ごと降り注いだ雪原のようなうねりでそれはやっぱりわたしの肌で今朝は白骨を折ったような冬空の囁きに刺されてみたくて早起きした裸足の冷たさ残した縁側を往來したお彼岸もうすぐそこだからとおばあちゃんが無表情で手招きしているのだからわたしいくね。

深町秋乃

受賞の言葉

この度は、身に余る程の賞を頂きまして、本当にありがとうございます。
段々と自分の作風が変化してきており、今年は全く自信がありませんでした。
この賞を励みにますます精進して参ります。

なぜ詩を書いているのですか？と問われても、自信を持つてはつきりとした文言で答えることができません。一つ言えることは、私は私が嫌いで、そんな私を唯一肯定してくれるのが詩の世界です。ただ心象風景を見つめていられる時間のなんと贅沢で心地良いことでしょうか。書くことに高尚な動機など必要ないと分かってから「書いてよいのだ、私は私のために書く」と思えるようになりました。書くことは、とても幸せなことです。

(嘲嗤うかのように嗚咽したら撓むのは湖畔をまさぐるわたしの伝線の黒髪が隅までなびく突端だらけの芯部は発芽したわたしのわたし滑らかな月下で初雪を被った腹部に産声をこっそり埋めて開脚して待つでせういつか鼻白んで実をもぐその日まで)

その日まで

(あの角を曲がるときつと轢かれるよねわたしたちゴミ収集車に)

(そうなるといいね、)

(まだ来ないけど)



ふかまち あきの

深町秋乃
1986 鹿児島県生まれ 熊本市在住
詩誌「アンプロシア」文芸誌「詩と眞実」同人
2014.15「文芸思潮」現代詩賞奨励賞

示唆の行方

由木名緒美

球体は弾けた
 その飛散した一粒一粒の種子が
 時代をあまねく代弁するかのよう
 ある方向へと向かって流れ出す
 思い出して欲しい
 白い腕が守ろうとしていたのは何だったのか
 幸運の女神は目を伏せたまま
 思わしげな微笑を口元に保ち
 過去と現在を繋ぐ各駅列車の車窓は
 蛍光灯に照らされた孤独な旅人の帰路を翻弄する
 降り立つべき駅は、彼自身も知らないのかもしれない
 悲しみと光の速度が同じなら
 きつと涙は振り切られた使命の残滓となつて
 幸う出奔へと降り注ぐのに

誰も彼もが廻る既視感デジャヴの円環の中
 それが心地よく響くなら放逸など花開きはしないだろう
 人は覚束ない足取りに展望を託す
 あなたとの戯れがそうであるように
 手指は絡み合い貝殻を模倣する

一滴の滴り
 それが血であるか涙であるかは
 最期の時まで判らない
 天秤を揺らす到達と未踏が
 世界の支柱に震えを刻む
 その時こそ、私は溢れ出る価値の奔流を泳ぎ切り
 新たな喜びの命名を結実させるであろう

受賞の言葉

詩を書く原動力となる葛藤や感嘆は、それだけでは本来分割した感応の群れでしかない筈なのに、詩として書き終えた段落からはそれらの記録を越えて、雨後に立ち昇る靄のように、結論と祈りとを渾然化させた風景が合間見えます。詩は現実の骨組みを濾過して立ち上がる幻の門でありつつ、独自性を排除させた空の器から浮かび上がる、自己を俯瞰した懐からの便りのように思います。今後は自己完結に帰することのない広い世界への視点を培っていきたいです。選んで頂いた選者の先生方、本当にありがとうございます。



ゆうき なおみ

由木名緒美

1983 福島県生まれ
 99 福島県立若松女子高校中退
 清掃会社、飲食店勤務を経て
 病気により自宅療養

2015 第11回「文芸思潮」現代詩賞優秀賞受賞

湾岸にて

狂騒の街角で霧散する美を、逆さになった躍動する踵が震えている
白が艶やかで後ずさり、粘膜を左肩から乳房にかけて
鈴の音は飽和に達した途端、夕暮れの柔らかかみに生まれ変わる

個々にもっともつと世界を描く

迷宮の隔たりに体軀が萎むのを避けていて

異様に小さな背中が一滴に醒めた花盛りの毒を盛る

薄暗闇にある透明な神勅、然るべき湾岸に伝う

あともう少し月の精巧さを、正しいと思う黒ずんだ葡萄を

一つひとつ丁寧に力を抜いて、仔猫の両眼は欲するままに全裸となり

静止画に映し出す臆病さを赤土の突端に結わうこと

体験しなければ、若草色の天使は堪え切れない感慨で

何かを吹っ切ると、何色に発光しているの

ここは海でもあり、太陽も胸の辺りに活かされて

もっと優しくして、久永い狂言の場にて長髪を轟かせた

今変わる寸前で強い赤、非対称の蜻蛉が突先に交わる

凜とした湾岸にて、蕾は直覚で発熱に湛える

十六面体のある一面、左利きの稀少な感情、何ものだ。

蒼井未龍

蒼井未龍

あおいみりゅう

詩人

1968年東京都生まれ

立教大フランス文学科卒業

放送局に約15年の勤務を

経て、詩的言語の表現に専

念する

千葉県浦安市在住

Liquid

受賞の言葉

毎日考えていることは、日本語のありよう
と、そのほとばしり、前向きなことばです。

風呂に入っても、犬と散歩していても、食事
中でも、常に常に頭を離れません。

心も身体も、そのように馴らされてしまっ
ているようです。

それはラーメン屋さんが、よりおいしいス
ープを求めていく行為と同じだろうと思います。

百年後に残ればいい、よりソリッドで骨太な
詩を書き続けてゆきたい、それだけです。

本当にありがとうございます。

自らの位置を

根元から揺らす潤いの加速度に

三角に、差異が助言を秘めている

全て達磨より進め、残ればいい内実とともに

心に余裕を、液状の実質を掴むということ

ハチドリが均等に転換し、連なって、耳元を抉り

圧倒的な復讐だけが周密に、鈍くその心を見失いつつ

絶対に沈黙と、自分で自分を愛するということ

深い虚無に、死ぬまでに微笑んで

その横貌にしか分からない方法で、早朝の憤怒を瞬く回復させて

青い光、あまりに憂いすぎる

贅沢な人生、万の挫折が明色に戯れて

同じ弧状を描いて、思考を消したならば

本当によく頑張っていると

どろりと快楽が、無駄な力を省く手がかりとして。

捨心

病みしもお

刻まれた傷を抱えたまま

夢も見ずに眠る夜を重ね

心中には悲しみの棺が宿る

——いつの日か、碎けるだろうか

夢や希みを託した言葉は

黎明を待たずに

燻ぶり濁って行く

届かない言葉が

砕かれて堕ち行くその前に

永遠の重みを手にしたならば

君は迷わずに、選んでくれるだろうか

虚像の混じった

曖昧な言葉を疑ったまま

未だ愛も知らぬ間に

脳裏に浮かぶ哀憐の隘路

——いつの日か、伝わるだろうか

希みを持つことに怯え

光に溢れた世界は

遠ざかり薄れて行く

伝えたい心中を

奪われて失くしたその後で

永遠の重みに気が付いたならば

君の傍から、離れはしないだろう

千草ちとせ

受賞の言葉

絵を描く事と詩を書く事に興味を持ち始めた時から、この二つの事をずっと続けて行けたらと思っています。今回優秀賞に選んで頂いたことは、今後、大きな励みになることと思います。どうも有難うございました。



千草 ちとせ

ちぐさ ちとせ

1991年生まれ/新潟出身
日本大学芸術学部美術学科卒業

Trust

たくさんの線が
点をすり抜け消えていく

足踏みしているだけじゃない
前だけが正しいわけではないと
消えていく足跡を見つめては
空を見上げて聞いてみる

「いろんな色の点が落とされているよ
手を探してごらん」

たくさんのもそれっぽいものに
すがるように手を伸ばすけれど
薄さや冷たさを感じるから
握って放しては早歩き

「心で見るんだよ」

誰かのための
線だった時がある
その手は暖かく鮮やかだった

折れているのに見ぬふりで
追い越したことも

その時自分の足跡が
消えていくのを知りながら
傷になったり
振りほどいても

空が見ている

この狭い世界で
小さな心に感じる暖かさ

少しずつ、迷いながら近くなる
足音が、空に問う声が
聞こえてくる

いくつもの色が調和を始める
目を閉じるとほら
見えるよ

徳永江梨子

受賞のことば

これまで文字や言葉と共に歩んできました。中でも詩となる言葉はいくらでも生まれましたが、一昨年度までの三年間、私の中に一つの言葉もなく詩を一切書かない時期がありました。一年前電車に乗っている時に、また言葉が浮かぶようになってからは、それまでの詩とはまるで違うものを書くようになりました。今回優秀賞を頂いたのは、新しい自分が書いた三作になります。ありがとうございます！



徳永江梨子

とくなが えりこ

1985 長崎県で生まれる

87～2008 福岡県久留米市で育つ

2013 障がい者就労支援事業所コラボ立ち上げ
福岡市内に2事業所を運営する統括マネージャーとして現在も活動

昭和さんくちゅあり

中村郁恵

あえて
やっかいな内側から攻めるのが
9歳なりの流儀だった
内から外へつながる鉄の棒に
腕を伸ばしつかむ手のひらも
膝を曲げて引っかける足うらも
陽の光と戯れていた

鉄の棒一本を1辺に見立て
いくつもの垂直と平行の辺で
結合する正方形と
いくつもの正方形と正方形で
組織する立方体の
辺から辺へ
からだじゅうの屈筋と伸筋を交互に
なめらかな連動を編んでいった
狭い立方体の枠組みのなかでは
鉄の棒たった一本の隔たりで
すぐそばの友だちの顔が遠くに見え
だれかの手足を踏まないよう
無言で互いの呼吸をずらす
ささやかな感覚が生まれていった

平面から立体をくぐり抜けた
たくさんのこどもたちの
汗と息づかいは
塗装が禿げ錆びかけた鉄の
歳月とともに内包され
あたらしい風が通り抜けるたび
丸みのある辺の上で揺れあい
さらに熟れていった

きょうはまず 横に3つ
きょうは 縦横1つずつ進んでからと
毎日ちがう上り方をめざしていた
内から外へ向かう最後の正方形を
はじめて
突き抜けたときに広がった
一人称の青ひと色

もういちど もういちど と
なんども 下りてはまた上り
立方空間を自在に移動できた
小さすぎなく 大きすぎない
からだ と ころには
ジャングルジムがよく似合う
遊なるひととき
が、あった

受賞のいきほ

何かに心が響いた時、似つかわしい言葉を探します。ようやく見つけた言葉からは、今まで知らずにいた、言葉そのものがもつ眼差し、温度や方向性を感じ、私の心もまた新たな伸縮を覚えます。言葉本来の底力に触れられる喜びを味わいたくて紙に向かいます。
この度は、優秀賞に選出していただきありがとうございます。まだ精進途上ではありますが、何よりもの励ましとなりました。言葉と心の呼応で独自の詩作につなげていきたいと切に思っております。



中村 郁恵
なかむら ふみえ
1965 北海道札幌市生まれ 主婦
4年前より詩作をはじめ
2015 第11回現代詩賞奨励賞 受賞